当日配付・投影資料

2009年西スマトラ地震被害と救援の概要

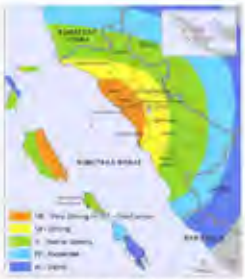
西 芳実　東京大学大学院総合文化研究科　「人間の安全保障」プログラム助教

支援の現場と研究をつなぐ
—2009年9月西スマトラ地震におけるジェンダー、コミュニティ、情報—

2009年西スマトラ地震 被害と救援の概要

西芳実
2009年11月25日
東京大学大学院総合文化研究科
「人間の安全保障」プログラム

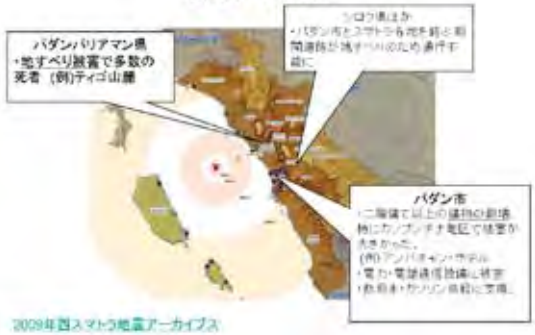
2009年9月西スマトラ地震



- 2009年9月30日17時16分
- 震源：スマトラ島中部沖（パダン市西北西約45Km）、深さ71Km
- M7.6
- 死者1117人
- 倒壊家屋十数万棟

OCHA Indonesia Earthquake, Situation Report No 16 (20 Oct 2009)

被害の概要



インドネシアにおける地震災害

- 2004年インド洋津波／2004年スマトラ沖地震津波以降
  世界：国際協力の焦点課題としての自然災害対応
  政府：アチェ・ニアス復興再建庁の設置
  社会：ボランティア元年
- その後も頻発した地震（主にスマトラ★とジャワ☆）
  2004年スマトラ沖地震津波（アチェ州）★
  2005年ニアス島沖地震（北スマトラ州ニアス島周辺）★
  2006年ジャワ島中部地震（ジョグジャカルタ州、中部ジャワ州）☆
  2006年ジャワ島中部地震津波（中部ジャワ州バンガンダラン周辺）☆
  2007年スマトラ島南西沖地震（ベンクル州、西スマトラ州）★
  2009年西パプア地震（西パプア州）
  2009年西ジャワ地震（西ジャワ州）☆

⇒①さらなる制度的な対応の必要が認識されていた
（インドネシアの内閣改造）
②地震や防災への国民的な関心の高まりのなかで発生した

西スマトラ地震の位置づけられ方

（1）中規模の自然災害
ー「国家災害」認定／緊急段階1ヶ月
（2）都市の災害：都市機能が麻痺
ー中層建築の倒壊・・・植民地期につくられた街や建物の被害
ー道路・電力・通信といった社会的インフラの被害
ー飲用水・燃料供給の支障
(3)マレー世界の「心の故郷」の災害
ー西スマトラ／ミナンカバウの歴史と文化
ー伝統的な労働力移出地域
⇒インドネシア各地から支援の手

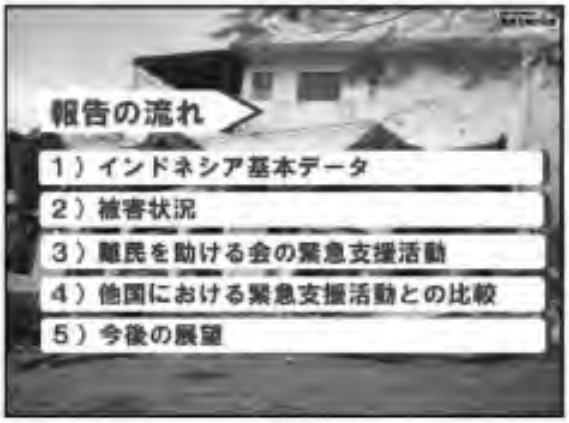
結びにかえて

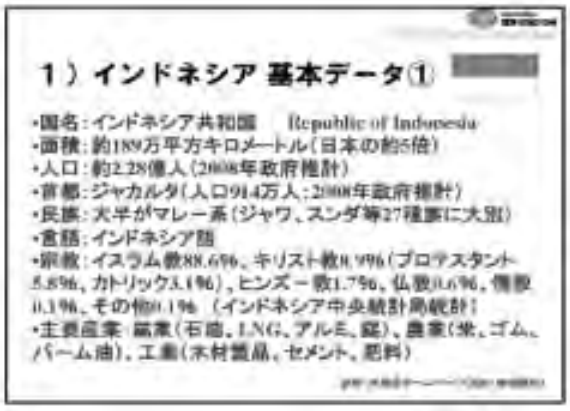
- 現場の情報と研究の情報をどうつなぐか
- その前に・・・被災地／救援活動の全体像をどのように把握するか
- ひとつの試み・・・2009年西スマトラ地震アーカイブス
  http://disaster.net.cias.kyoto-u.ac.jp/Sumbar_j/

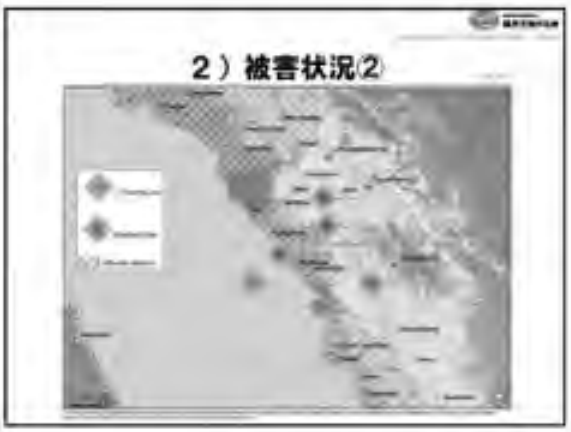
当日配付・投影資料

難民を助ける会西スマトラ沖地震緊急支援概要

野際紗綾子 難民を助ける会　シニア・プログラム・コーディネーター







３）緊急支援活動の概要

被害状況把握とニーズ調査

結果・・・

・被災世帯の多くが、政府や援助機関から数日分に満たない少量の食料を一回のみ受領

・パダン市内の障害児のいる家庭について、国内外の支援がほとんど行き届いていないことが判明した。

３）緊急支援活動の概要

緊急支援物資の配布（第一陣）

・期間：10月7日（水）～10日（土）

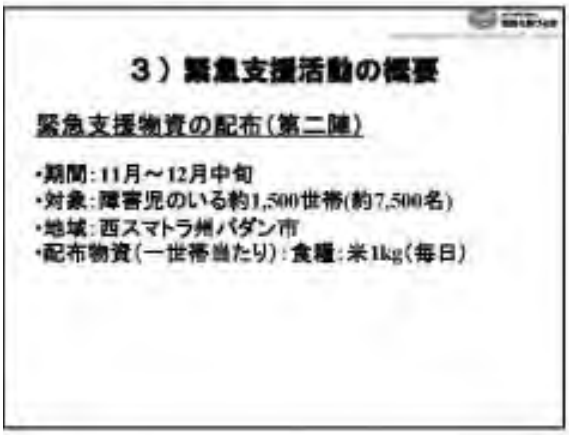
・対象：565の障害児がいる世帯(約3,000名)

・地域：西スマトラ州パダン市

・配布物資（一世帯当たり）：

（1）食糧：米5kg、水20リットル、魚缶、乾燥麺5袋

（2）生活用品：ろうそく6本


3）緊急支援活動の概要
緊急支援物資の配布（第二陣）
・期間：11月～12月中旬
・対象：障害児のいる約1,500世帯(約7,500名)
・地域：西スマトラ州パダン市
・配布物資（一世帯当たり）：食糧：米1kg（毎日）

4）他国の緊急支援活動地との比較①

【共通点】

①被害状況や支援活動の全体像の把握：クラスター会議を中心とした分野別の調整が実施されている

②障害者（災害弱者）支援について、さらなる対応の改善が必要

⇒国際援助およびインドネシア社会の両方において、障害者への配慮が不足

4）他国の緊急支援活動地との比較②

国際援助

☆クラスター会議（Cluster Meeting）：食糧、水衛生、シェルター、栄養、保健医療などの部門ごとに分かれて、国連・政府・国内外のNGOが一緒に会議に参加する（例：Food Cluster, Health Cluster）。会合では、①被災地における最新情報と課題を共有し、支援の重複を防ぐのと同時に、②全体としての効果的な支援を目指す。

⇒分野横断的な障害者のニーズの把握ができていない

4）他国の緊急支援活動地との比較③

インドネシア社会

低い障害者の割合：1.5%（社会省（Ministry of Social Affairs）および統計中央局事業（Statistic Central Board））

（ひと目でわかる障害関連情報：アジア太平洋29の国と地域のプロフィール（2007年3月、国連アジア太平洋経済社会委員会（ESCAP）の29か国中、クック諸島（0.7%）に次ぐ27位の低さ）

途上国における障害者の割合：15%、またその6割が農村部に居住（世界銀行）

5）今後の展望

災害緊急復興支援従事者および地域の人々の障害分野における認識不足に対して、何ができるか？

⇒障害のメインストリーミング

⇒緊急支援ガイドラインの普及・改善

例）災害時要援護者対策ガイドライン

スフィア・スタンダード

（例）CBR（Community Based Rehabilitation in Emergencies）

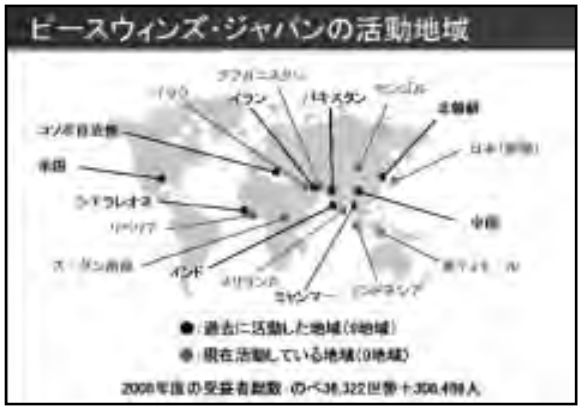
"Build Back Better"

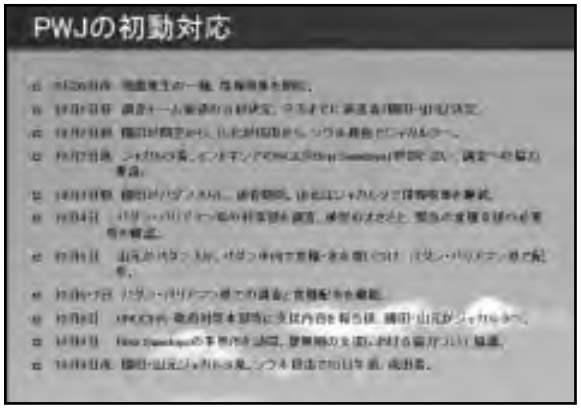
災害前よりもより良い状態へ

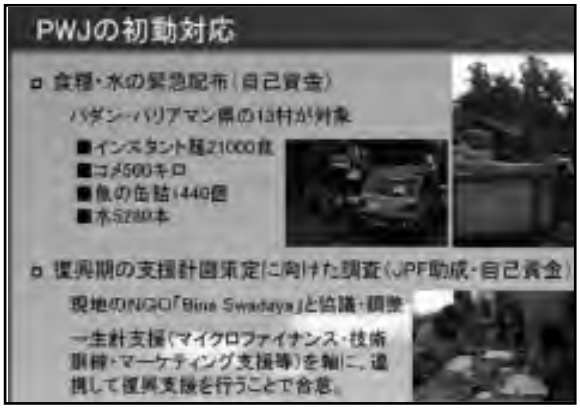
当日配付・投影資料

ピースウィンズ・ジャパンの西スマトラ対応

國田博史 ピースウィンズ・ジャパン　尾道事務所所長







パダン市内の被災状況

パダン市内の被災状況

パダン市内の被災状況

パダン市内の被災状況

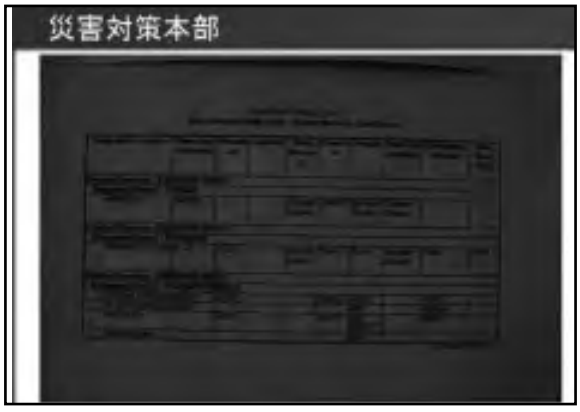
村落部の被災状況（パダン・パリアマン県）

村落部の被災状況（パダン・パリアマン県）

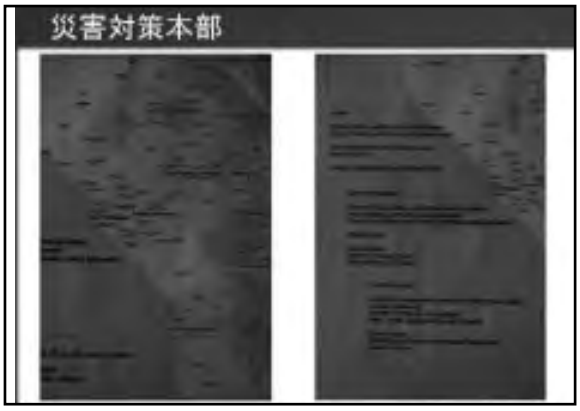
村落部の被災状況（パダン・パリアマン県）

村落部の被災状況（パダン・パリアマン県）

災害対策本部


災害対策本部

災害対策本部


災害対策本部

災害対策本部

災害対策本部

緊急の食料配布

緊急の食料配布

緊急の食料配布

緊急の食料配布

緊急の食料配布

現地NGOとの協議

ありがとうございました

当日配付・投影資料

現代ミナンカバウ社会におけるイスラームとアダット

服部 美奈　名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授

現代ミナンカバウ社会
におけるイスラームとアダット

服部美奈
名古屋大学大学院教育発達科学研究科

はじめに－自己紹介

- 長期滞在1993年～1996年　パダン・パンジャン
- 離領東インドで初の女子イスラーム学校ディニア・プトリ(Diniyyah Puteri)を軸に、20世紀初頭以降のイスラーム改革運動と女子教育の展開について研究
- 以降、数年に一度の間隔で短期現地訪問

ミナンカバウ地域の特徴

- 人口の大半がムスリム、ミナンカバウ人　（パダン、ブキティンギなどの都市部に華人、バタック人などが居住）
- 母系制原理を基盤としたアダット（adat）とよばれる慣習法とイスラーム信仰
- 両者は不可分な要素として存在

ミナンカバウ地域のなりたち

- タナ・ダタール(Tanah Datar)、アガム(Agam)、リマプル・コタ(Limapuluh Kota)という３つの内陸中核地域であるダレック（darek内陸高地）
- 海岸地帯を含めた他のランタウ（rantau周辺地域）に村落分離を繰り返しつつ拡散
- ナガリの自律性を支えるものとして母系制原理を基盤とするアダットが存在

イスラームと母系制の共存

- ミナンカバウの特殊性として関心の対象
- Adat bersendi syarak, syarak bersendi Kitabullah（アダットはイスラームに基礎を置き、イスラームはキタブラ（クルアーン）に基礎を置く）という語
- 両者は相互補完の関係にある

イスラームとアダットをめぐる歴史的展開

- 16世紀後半　ミナンカバウ王のイスラームへの改宗
- 16世紀末から17世紀後半　海岸地帯における本格的なイスラーム化から、内陸部地域への浸透
- 18世紀末から　宗教改革運動としてのパドゥリ(Padri)運動
- 1821年から1837年　パドゥリ戦争
- 20世紀から　エジプトのムハンマド・アブドゥらの影響を受けたイスラーム改革運動

イスラームとアダットの関係変化

- イスラーム到来以前　「アダットは適切さと妥当性に基礎を置く(Adat bersendi alur dan patut)」
- イスラーム到来後　「アダットはイスラームに基礎を置き、イスラームはアダットに基礎を置く(Adat bersendi syarak, syarak bersendi adapt)」
- パドリ運動後　「アダットはイスラームに基礎を置き、イスラームはキタブラ（クルアーン）に基礎を置く(Adat bersendi syarak, syarak bersendi Kitabullah)」　アダットに対するイスラームの優位な関係、同時にアダットは普遍的なイスラームによって完全なものになった [加藤 1980:251]

20世紀以降のミナンカバウにおけるイスラーム

- 西スマトラは新しいイスラーム改革思想を蘭領東インドの他の地域に浸透させる上で最も重要な役割を果たした地域の一つ[Deliar Noer 1980:37]
- 改革派の優位とタレカット（神秘主義教団）の衰退
- 独自の（それぞれの）組織が社会活動。

伝統的な母系制の特徴

- 出自は母方を通してたどり、一つのナガリに住む同一出自をたどる人々は母系親族集団を形成
- 最も高いレベルの母系集団はスク（氏族）
- パユン（payung）
- バルイック　ルマ・ガダン(rumah gadang)とよばれる大家屋
- 共同世襲財産の使用権(ganggam berusuk ガンガム・ブルワントック。売却などの処分権は含まない)は各ルマ・ガダンに配分される
- 「所有者」は女性

伝統的な母系制の特徴

- ルマ・ガダンも女性の所有。妻方母方両居制。
- 女性および子どもたちの保護者・後見人はママック(mamak)。ママックとはオジと同列・同世代の、母系制によって親族関係にある男性。
- クマナカン（kemanakan）は男性からみた場合、自分の姉妹の子どもたち、およびそれと同列・同世代の母系親族。
- 伝統的ミナンカバウの母系制において最も重要な人間関係はママックとクマナカン。

母系制の変容

- 経済・居住単位としての基本はバルイックではなく核家族
- 核家族の生活は、母親の利用できる共同世襲財産と父親の自己取得財産(Harta Pencarian ハルタ・プンチャリアン)に
- 世帯主の役割は夫（父親）。一方、アダットに関わる事柄はママック。

女子教育の展開

- 20世紀初頭から女子教育の推進
- ラフマ・エル・ユヌシヤーは、女性のための近代的イスラーム学校ディニア・プトリを設立。
- コタ・ガダン出身のロハナ・クドゥスは女子のための裁縫学校クラジナン・アマイ・スティアを設立。
- 男女を問わず、学問はムスリムにとって義務であることを明らかにし、「天国は女性の足元にある」という言葉によって女性の偉大さと高貴性を強調。

イスラームとアダットの強調

- 1958年に「インドネシア共和国革命政府(PRRI)」の樹立を宣言して西スマトラで起こった中央政府に対する反乱の挫折
- インドネシア全体におけるミナンカバウ人の影響力の低下
- ミナンカバウ人が誇りにすべき文化的資産としてのイスラームとアダットの強調

「改革（レフォルマシ）」（1998）後の急速な社会変化

- 地方への権利委譲による地方アイデンティティの活性化
- ミナンカバウ人の問い直し，土着知(Kearifan Lokal)の発掘
- 県・市を中心とした自治体への大幅な公務員の異動、事務権限の移譲，天然資源収与度の高い自治体を中心とした予算の大幅な増大

州・地方条例の制定

- 慣習法・イスラームの再興
- 西スマトラ州条例（2001年11号）
- 西スマトラ州パサマン県地方条例（2003年22号）

おわりに

- 地域文化に根ざした支援
- マイノリティ・グループへの視座（華人，ムンタウエイの人々）－公定地域主義による「再発見」への包摂

参考文献

Alfian 1989. *Muhammadiyah: The Political Behavior of a Muslim Modernist Organization under Dutch Colonialism*. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.

Attayah, Taufiq 1993. *Pembaruan Muhammadiyah dan Muhammad Abduh*. Suatu Studi Perbandingan. Bulan Bintang.

Deliar Noer 1973. *The Modernist Muslim Movement in Indonesia 1900-1942*. Oxford University Press.

Deliar Noer 1980. *Gerakan Modern Islam di Indonesia 1900-1942*. LP3ES.

Hamka (Haji Abdul Malik Karim Amrullah) 1957. *Agahkan Binasoi Hidup DR H Abdul Karim Amrullah dan Perjuangan Kaum Agama di Sumatera*. Jakarta:UMINDA.

Hamka 1978. "Mengenangkan Dua pula Tahun 53 Tahun."In Peringatan Dua pula Tahun Pedang Panjang. 1978. *Peringatan 53 Tahun Dua pula Tahun Pedang Panjang*. Gema Islamiyah, pp.25-28.

加藤剛. 1986.「盛上がるミナンカバウ社会とムスリムコーランとの活動の関係について」京都大学東南アジア研究センター『東南アジア研究』第 18 巻 2 号, pp.222-234.

Mahmud Yunus. 1957. *Sejarah Pendidikan Islam di Indonesia*. Mutiara Sumber Widya.

Mahmud Radjab. 1954. *Perang Padri 1803-1837*. Perpustakaan Pendidikan dan Kebudayaan.

ムハマッド・ラジャブ（加藤剛訳）1983『スマトラの村の思い出』のこと。（原題）Mahmud Radjab. *Sewaktu Kecil di Kampung 1915-1920: dan biografi seorang anak Minangkabau*. Balai Pustaka,1950.）

大木昌. 1984.『インドネシア社会経済史研究－植民地期ミナンカバウの経済構造と社会変化』勁草書房.

Peraturan Daerah Kabupaten Pasaman Nomor22 Tahun2003 tentang Kesepakatan Mufakat dan Maukmik bagi Siswa Mahasiswa dan Karyawan.

Peraturan Propinsi Sumatera Barat Nomor11 Tahun2003 tentang Pencegahan dan Pemberantasan Maksiat.

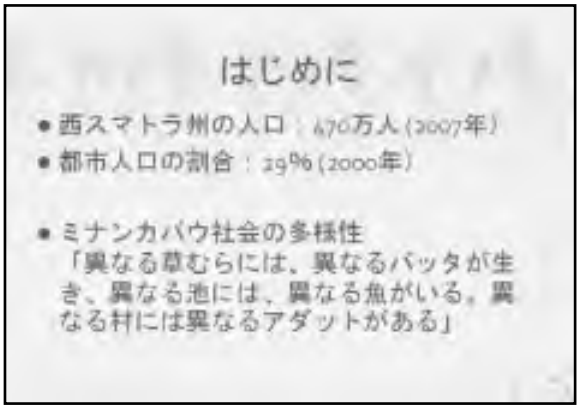
Sjechdatuk,K.A. 1985. *Beberapa Aspek tentang Islam di Indonesia Abad ke 19*. Balai Bintang.

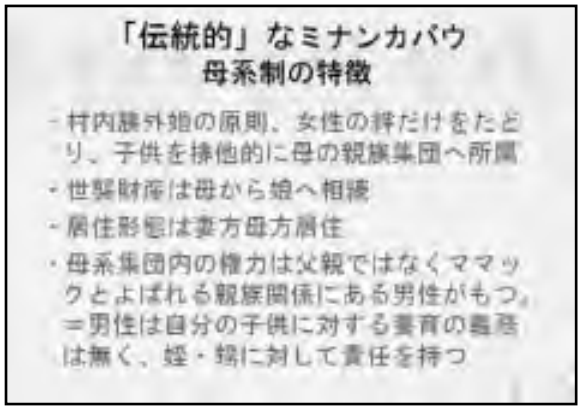
Taufik Abdullah 1971. *Schools and Politics:The Kaum Muda Movement in West Sumatra 1927-1933*. (Southeast Asia Program, Modern Indonesia Project, Monograph Series, Cornell University.

当日配付・投影資料

ジェンダーの視点からみた西スマトラ村落コミュニティ

山田直子　東北大学国際交流センター講師

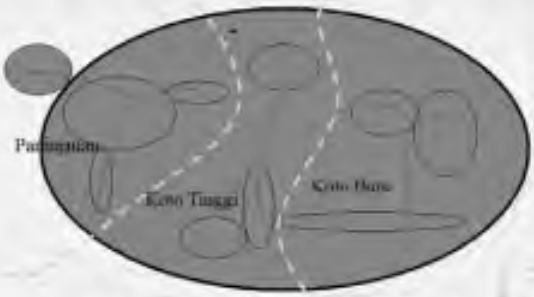




調査地概要

アガム県タンジュン・ラヤ郡ナガリ・ティゴ・コト
人口：　5,206人
面積：　11.56 km²
主な生業：　水稲耕作、魚の養殖、野菜の栽培
ナガリの構成：
- Koto Baru
- Koto Tinggi
- Paninjauan

通婚圏とムラの境界性



通婚圏
インフォーマントの世代

- 男女ともコタ内で配偶者を得た
  離婚後の再婚相手も同じコタの住民
- 他地域へ移住をしても男性は婚期に村へ帰り結婚式の後、再び移住先へ戻った
- 女性は世襲財産を守るために、地縁・血縁強化のための婚姻を強いられる傾向があった。離婚した後も、再婚が容易。
- 家族的農業生産＋婚姻による紐帯強化＝村落共同体的の「まとまり」を形成

通婚圏
インフォーマントの子供の世代

- 同じコタ、同じナガリの出身者と結婚をするケースが大きく減少
- 結婚相手は他地域に移住しているミナンカバウ人
- 現在は婚姻による村落内の紐帯強化は以前ほど重要ではなくなった（例:賃金労働者による田植えや稲刈り）
- 人口増加や女性のムランタウが活発になったことが要因として考えられる

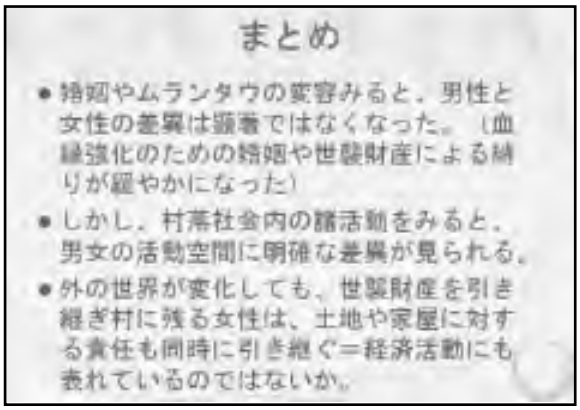
ムランタウの変容
インフォーマントの世代

- 「男性は生計を求めてよその土地に旅に出る慣行がある。女性は村に残り、男性はムランタウに出かける。」
- 男性のムランタウが中心
- 女性は村の男性と結婚後、村を出ることがあったが、それほど多くなかった

ムランタウの変容
インフォーマントの子供の世代

- 男性、女性に関わらず、多くの村人が他地域へ出ている（ムランタウ先も多様）
- 世襲財産を相続する娘を村に残すこともあるが、子供全員が村を出て、年老いた母親のみが村に残るケースも多い
  - 孫を村に一時期村に戻す
  - 祖母が子供のムランタウ先を転々と移動し、村には数ヶ月のみ滞在
- 母親の村での存在＝世襲財産を継承し、守っているというシンボル

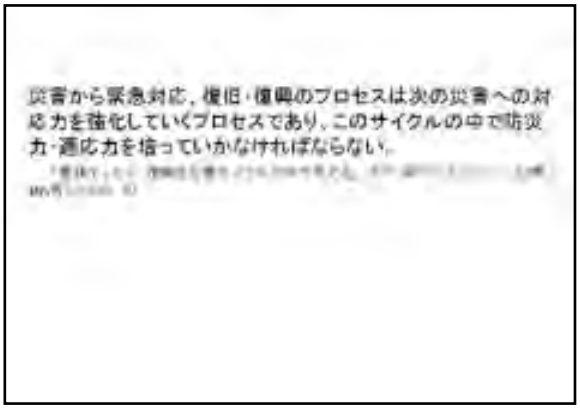
空間にみる男性と女性の差異

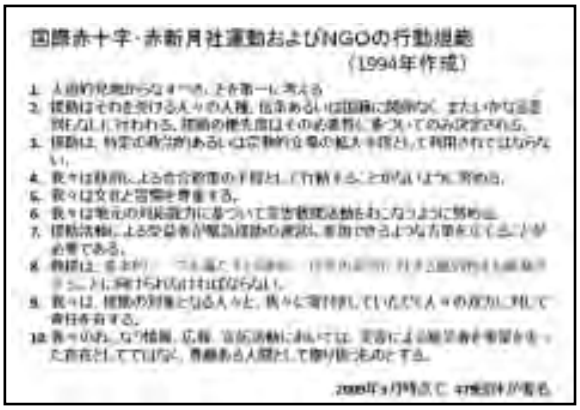

まとめ
● 婚姻やムランタウの変容みると、男性と女性の差異は顕著ではなくなった。（血縁強化のための婚姻や世襲財産による縛りが緩やかになった）
● しかし、村落社会内の諸活動をみると、男女の活動空間に明確な差異が見られる。
● 外の世界が変化しても、世襲財産を引き継ぎ村に残る女性は、土地や家屋に対する責任も同時に引き継ぐ＝経済活動にも表れているのではないか。

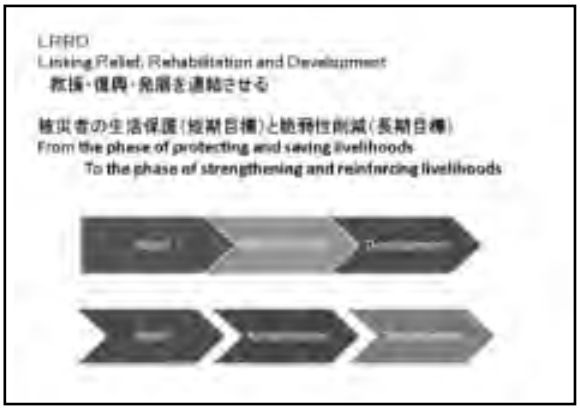
当日配付・投影資料

コメント

林 勲男　国立民族学博物館准教授







支援の現場と研究をつなぐ

2009年9月西スマトラ地震における ジェンダー、コミュニティ、情報

東南アジア学会 緊急研究集会

●日時◇2009年11月25日（水）　午後2時～午後5時
●場所◇東京大学駒場キャンパス18号館ホール
（京王井の頭線駒場東大前駅下車）

趣旨説明　山本博之（京都大学地域研究統合情報センター准教授）
第1部　現場の情報　被災と救援
1．「2009年西スマトラ地震　被害と救援の概要」
西芳実（東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム助教）
2．「難民を助ける会の西スマトラ沖地震緊急支援　他の災害支援現場との比較から」
野際砂綾子（難民を助ける会　シニア・プログラム・コーディネーター）
3．「ピースウィンズ・ジャパンの西スマトラ対応」
園田博史（ピースウィンズ・ジャパン　尾道事務所所長）
第2部　研究の情報　社会と文化
1．「現代ミナンカバウ社会におけるイスラームとアダット」
服部美奈（名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授）
2．「ジェンダーの視点からみた西スマトラ村落コミュニティ」
山田直子（東北大学国際交流センター講師）
第3部　討論
1．コメント　加藤剛（龍谷大学社会学部教授）
2．コメント　林勲男（国立民族学博物館准教授）
3．総合討論

●問合せ先◇東南アジア学会事務局
〒441-8522 豊橋市町畑町1-1　愛知大学国際コミュニケーション学部　加納寛研究室
Email　jsseas@ml.rikkyo.ac.jp　　URL　http://www.jsseas.org/index.html

●主催◇東南アジア学会
●共催◇JST JICA地球規模課題対応国際科学技術協力事業「インドネシアにおける地震火山の総合防災策」（グループ4-2「地域文化に即した防災・復興構想」）◇文部科学省「世界を対象とした　ズ対応型地域研究推進事業」「人道支援に対する地域研究からの国際協力と評価　被災社会との共生を実現する復興・開発をめざして」◇特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォーム◇地域研究コンソーシアム（社会連携研究会／地域研究方法論研究会）◇京都大学東南アジア研究所（公募共同研究「アジアにおける大規模自然災害の政治経済的影響に関する基礎的研究」）◇東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム

支援の現場と研究をつなぐ

2009年西スマトラ地震における ジェンダー、コミュニティ、情報

東南アジア学会
緊急研究集会

●日時◇2009年11月25日（水）　午後2時～午後5時
●場所◇東京大学駒場キャンパス18号館ホール
（京王井の頭線駒場東大前駅下車）
●主催◇東南アジア学会

趣旨説明

9月30日にスマトラ島沖を震源として発生した大地震により1100人以上が死亡し、さらに多くの負傷者が出ています。また、家屋、病院、学校を含む13万棟以上の建物が倒壊し、住む家を失った多くの人びとが建物の崩落や地滑りを恐れて避難所で過ごしています。被災から3週間を迎え、被災地のパダン市では電気の95%、水道の85%が復旧しましたが、被災地はこれから長い復興再建の道を歩むことになります。

この地震は人命や財産だけでなく、西スマトラ地域の、ひいては東南アジアの人びとにとって自らの精神的な拠り所となる文化遺産も奪いました。この地域がイスラム教を受容してから約300年にわたって民間で伝えられてきた貴重な文献数十万点が地震や地滑りで失われ、また、博物館では宋代以降に中国や日本から伝えられた陶磁器の半数が失われたとも報じられています。世界各地と繋がっていた過去を失うことで、世界における自らの位置づけを見失う恐れが指摘されています。

東南アジアを研究する学徒として、あるいは隣人として、被災地域の人びとに何らかの救援をと思わざるをえません。ただし、被災直後の現場に身を置くことによってではなく、緊急対応から復興再建への移行を念頭に置いて、専門性を活かした関わり方として研究集会を開催することにしました。

＊

災害は、人命や財産を失う忌まわしい出来事であるとともに、社会が抱える潜在的な課題や矛盾を露呈する契機になるという一面も持っています。その社会に属する人びとには慣習や禁忌として変更不能と映っていたことが、緊急・復興支援という名による外部社会からの働きかけが可能になり、状況改善の契機がもたらされるという捉え方です。災害によって「壊れたものを直し、失われたものを与える」あるいは「被災前に戻す」だけではなく、災害を契機によりよい社会を作るような支援があり得るはずです。

今回の震災では、西スマトラ社会（あるいはインドネシア社会）が潜在的に抱えるどのような課題や矛盾の一端が明らかになり、そこにどのように働きかけることによって人びとがよりよい社会を作るのを手助けできるのか。このことを考える上では、被災や救援の「現場の情報」と、研究者が蓄積している「研究の情報」とを結び付ける必要があります。

この研究集会では、被災直後の救援活動で現地入りした人道支援関係者による「現場の情報」と、時間と空間の両面から被災地をより広い文脈において捉えてきた研究者による「研究の情報」を繋ぐことで、西スマトラ社会（あるいはインドネシア社会）に関する学術研究に新しい展開がもたらされるとともに、被災を契機によりよい社会を築こうとする人びとにとって適切な支援のあり方が得られることを期待しています。

＊

よく知られているように、西スマトラ地域の多数派を占めるミナンカバウ人社会は母系制の社会であり、家や土地を女性が相続し、男性は生計を求めてよその土地に旅に出る慣行があります。このような社会で住宅再建や起業支援においてジェンダーの要素がどのような影響を与えるのかは、実践の上でも学問の上でも十分に検討に値する事例でしょう。また、域外に出る男性たちに目を向けるならば、ミナンカバウ人のネットワークを通じてインドネシア全土から西スマトラ地域へ届けられる支援を見ることができます。行政が領域に対する支援を行うのに対し、個別の繋がりによって域外から支援が届けられる状況は、被災地のコミュニティにどのような影響を与えるのか。さらに、近年では男性たちが域外に働きに出るのに対し、女性たちは近郊の都市に働きに出て、山間部では高齢者と子どもが世帯を構成するという状況も多く見られます。男性がよその土地に出る慣行を含めて人口流動性が高い社会をどのように捉えるかは、緊急・復興支援に限らず、インドネシアや東南アジアの他の社会と関わる上で重要な示唆を与えてくれるはずです。

＊

「現場の情報」と「研究の情報」を結ぶことは、緊急時に全体像をどのように把握するかという問題とも関係しています。被災地入りした救助隊が被害の全体像が掴めないために救助活動の展開に苦労したと伝えられているように、大規模自然災害などの緊急時には全体像を把握する情報収集と伝達が極めて重要になります。現場に入る人が効果的に活動するためにはどのような情報収集が必要なのかという観点からも、「現場の情報」と「研究の情報」の繋ぎ方を考えたいと思います。

＊＊＊